

OB 訪問

今回訪ねたのは今年卒業したばかりの新林さんです。介護老人保健施設を活躍のステージに選択した理学療法士の、「在宅」をキーワードにした高齢者の自立にかける思いをお聞きました。

介護老人保健施設 月形緑苑(つきがたりよくえん)

新林 裕太さん (リハビリテーション科学部理学療法学科2019年3月卒業)

きっかけは臨床実習。

当別町の隣町、月形町に沼を中心に27haの憩いの空間を広げる皆楽公園。水と緑が調和するこの公園に隣接する月形緑苑が新林さんの職場です。月形緑苑は超強化型*介護老人保健施設(以下、老健)で、今年4月には訪問リハビリテーションも始まりました。

本学理学療法学科卒業生の多くが医療機関へ就職する中、新林さんは老健を志望しました。きっかけは老健での臨床実習です。「就職先は自分のやりたいことが明確に見えてから決めよう」と考えていた新林さんが4年生の夏になって臨んだのが老健、浦河緑苑での3週間の実習でした。そこで「自分のしたい仕事はまさにこれだ」と確信したといいます。

※「施設から在宅へ」を基本方針に掲げる国は、介護老人保健施設をその在宅復帰機能から5つに分類。「超強化型」は在宅復帰・在宅支援機能が最も高いと認められた施設です。

進む道が見えた。

老健の実習で、新林さんは利用者さん宅の訪問が意外に多いことに興味を引かれました。「訪問リハビリテーションや在宅復帰前訪



通所利用者さんのいきいき体操。取材日は真夏日。笑顔で声をかけながらも利用者さんの様子をしっかりと観察、回数を調整するなど、頭の中ではクールな判断をしています。

問に同行しました。利用者さんの生活の場に身を置いて、手すりの設置や段差の解消など環境面も含めて必要なリハビリテーションを考えることに、理学療法士の仕事の広がり、面白さを感じました」。その前に経験した病院実習で患者さんの退院後を想定したリハビリテーションを行ううち、退院後の実際の生活への関心が高まっていたといいます。

そして、在宅復帰・支援に注力する老健で働くことを希望、実習先のグループ施設である月形緑苑に就職しました。まだ回数は少ないものの、新規利用者さん宅を訪問し、生活範囲、生活スタイルをその目で見て、聞き取って、必要な動作のリハビリテーションを導き出す過程にやりがいを感じています。

時には作戦を立てて。

現在、新林さんは月～金曜、午前中とお昼過ぎは通所利用者さん、午後は入所者さんのリハビリテーションを行っています。担当するのは通所・入所合わせて15名。「まだ先輩たちの3分の2程度なので、同じだけ担当できるようになるのが直近の目標です」と意気込みます。

入所利用者さんの中には認知症の方もいます。新林さんは当初こそとまどうこともあったものの、いまでは声かけのタイミングも計れるようになりました。「居室に迎えに行きあいさつした時の表情で、リハビリテーション室へ移動できるか、あらためて迎えに来たほうがいいのか判断できるようになりました」。リハビリテーション嫌いの利用者さんには「通所のお友だちが来ていますよ。会いに行きましょう」との声かけが功を奏することもあるそうです。一人ひとり、その日の状況に応じたコミュニケーション手法が日々磨かれています。



新林さんを含め5名の理学療法士と3名の作業療法士が専門性を融合させ、垣根を乗り越えて利用者さんごとのリハビリテーションが組み立てられます。チームワークのよさも利用者さんのモチベーションアップの要素の一つ。左は本学OB、2017年卒業の作業療法士・畑山拓大さん。

4年間を糧に。

本学での4年間を「勉強することが多く大変。でもその分充実していました」と振り返る新林さん。解剖学実習で献体されたご遺体を前に、命、死と真正面から向き合ったこと、人体の複雑さ、緻密さを目の当たりにしたことからも医療職としての覚悟や使命感が育てられたようです。

「まだ先ですが、知識、経験を増やし、在宅をキーワードにした症例発表ができるようになりたいし、得意分野、専門性ももちたい。そして、ゆくゆくはリハビリテーション部門をまとめられるような人としての大きさももちたいですね」。めざす理学療法士像へ、新林さんのキャリアは始まったばかりです。



在学中はダンス同好会PRANCYに所属。3年次には「第2回全道大学最強ダンスバトル アルキタ杯」で接戦の末、優勝。前列でプレートを持つ新林さんの後ろは、双子の弟亮太さん。亮太さんは本学卒業生の言語聴覚士。現在、岩見沢の病院で活躍中です。